

中華人民共和国東北部(旧満洲地区)における 未発見映画フィルム発掘及び関係者聞き取り調査報告

志 村 三 代 子

はじめに

二月一四日から二月二一日まで、中華人民共和国東北部(旧満洲地区)において戦前の未発見日本映画の発掘及び関係者聞き取り調査を行った。

本プロジェクトの直接のきっかけは、二〇〇一年二月二七日から三月二四日まで東京国立近代美術館フィルムセンターにて開催された「発掘された映画たち

二〇〇一・ロシア・ゴスフィルムモフォンドで発見された日本映画」である。太平洋戦争の終戦前後に旧満洲(中国東北部)へ進出した旧ソ連軍に接収されたとみられる戦前の日本映画がロシア・モスクワ郊外のゴスフィルムモフォンドで大量に発見された。一九九四年には大阪の会社社長による「何が彼女をそうさせたか」

(一九三〇年、帝キネ、監督・鈴木重吉)の発掘を皮切りに、一九九六年からフィルムセンター主任研究員の佐伯知紀氏がゴスフィルムモフォンドで本格的に日本映画の調査を行い、「日本映画」と分類された大量のフィルム缶から劇映画一七四作品を確認し、日本で上映の運びとなった。しかしながら、佐伯氏も指摘している通り、当時「満洲国」に大量輸入された日本映画のうち、国内で現存しない溝口健二の『浪花女』(一九四〇)、『芸道一代男』(一九四二)、『団十郎三代』(一九四四)、内田吐夢の『歴史』(一九四〇)、『鳥居強右衛門』(一九四二)、そして稲垣浩の『無法松の一生』(一九四三)オリジナルヴァージョンなどの所在が依然として明らかにっていない。さらに、満洲映画協会(満映)は戦中の作品ばかりではなく、一九二〇年代のサイレント映画も日本から輸入しており、例えば、マキノ雅弘の『浪人街』や現存作品が僅かしかない大都映画の作品なども満映配給で

上映されているのである。

「満洲国」で上映されたこうした大量の日本映画のフィルムは果たしてどこに行ってしまったのか。戦後五〇年以上経た現在、可燃性フィルムの寿命を考慮すると、一刻も早い調査発掘が必要であることから小松弘先生を中心に本プロジェクトがスタートした。

訪中前の事前調査で旧満洲地区における未発見日本映画について以下の情報を確認した。

・満映は当時一作品につき六、七本のプリントを輸入し、長春、瀋陽、大連、ハルビン、牡丹江、撫順などの主要都市の映画館へ配給していた。しかし、ネガを輸入したことはなかったため、日本映画のフィルムは全てポジフィルムである。これらのフィルムは満映の倉庫に保管されており、ジャンク(滅却)されたことはなかった。にもかかわらず敗戦直前の満映撮影所の敷地に、まるでゴミのように野積みになっていたフィルムの存在がロシアで伝承化されていた。

・一九五一年の五月、元満映社員の岸富美子氏が中国人の編集者を養成するための教材となるフィルムを探したところ、満映にほど近い「満洲赤十字社」のポイラー室で『無法松の一生』を発見した。岸氏がその大きなポイラー室に入ったとき、一瞬「海のようにフィルムがある」と感じたそうである。

・その後、「満洲赤十字社」のポイラー室のフィルムは、東北電影会社のフィルム格納庫があったララトンという地名の場所に運び込まれたという情報が岸氏の弟子筋から得られた。

・国文学研究資料館の古籍資料研究者が遼寧省大連図書館で大量の映画フィルムを目撃した。

ソ連進攻が一九四五年八月九日、先遣部隊が長春に到着するのは八月一九日であり、撤退は一九四六年の三月から五月である。岸富美子氏が「海のような」夥しいフィルムの中から『無法松の一生』を発見した時期が一九五一年であれば、一九四五年から四六年にかけてソ連が接収した日本映画のフィルムはそれほど多くなかったのではないかとということがまず疑問点として浮かび上がった。大連図書館の映画フィルム所蔵情報については、大連図書館が旧満鉄図書館であったことから、満鉄と関わりの深い満映が無関係であるはずがない。以上の情報をもとに、まず満映の撮影所があった長春を起点に瀋陽、大連と南下し、日本映画の発掘及び関係者聞き取り調査に赴くこととなった。なお、今回の調査にあたって、実に様々な職種の人たちに対してインタビューを行ったが、大別すると、大学、社会科学院、図書館、博物館、領事館などの公的機関と、映画研究者、映画監督などの民間の映画関係者に分けられるが、何よりも今回の最大の成果は、当初は想像もしなかった市井の骨董市場の店主たちとの出会いである。彼らはそれぞれ立場が違うものの、最初の長春で得られた情報がそのまま瀋陽に繋がり、最終目的地の大連で成果が得られたため、映画フィルム散逸の出发点である長春を最初に訪れたことは功を奏したようである。以下、時系列に報告していきたい。

長春

東北師範大学

東北師範大学文学部の孫中田教授を中心に、外国語学部副学部長の林嵐助教、文学部長の韓格平教授に対して、旧満洲時代の文化全般に対する聞き取り調査を行った。孫教授は、日本人による映画を含めた旧満洲時代の文化研究は、両国の歴史の空白を埋める作業であると一定の評価をしている。彼らは映画研究者ではないため、フィルムの有無に関する情報はほとんど得られなかったが、旧満洲時代に活躍した文学者、映画に詳しいと思われる文学者やシナリオライターに

関する情報を得た。

現在八十歳代の孫教授は、旧満洲時代を知る人物である。今回の筆者の調査目的のひとつは、当時の「日本映画」が「満洲人」にどのように受け止められていたのかということを知ることであったため、孫教授に当時の映画体験を語っていただいた。しかしながら、孫教授は映画館がない地方都市の出身であり、ましてや庶民はわざわざ都心部にまで映画を見ることがほとんど不可能であった。したがって孫教授は若年期に映画を見る機会がほとんどなかったという。そうした極少ない映画体験のうち、強く印象に残っているものは、当時の満映の国策的な内容とは無関係の白馬の剣士が登場する武俠映画であった。タイトルは不明であるものの、おそらく当時の「満洲人」に支持された上海映画であるように思われる。

*寄贈書籍・孫中田、逢増玉、黄万貨、劉愛貨『東北淪落区文学史綱』、一九九八年、吉林大学出版社。

胡昶氏インタビュー

『満映 国策映画の諸相』の著者である胡昶氏は、現在最古参の満映研究者であるとともに、先に面会した孫教授の教え子でもある。日本語訳書が刊行された一九九九年に来日し、岩本憲児先生主催の映画史研究会で講演も行っている。インタビューは撮影所近くの胡氏の自宅で行われた。

ソ連接収から免れた映画フィルムが東北電影会社のフィルム格納庫があった「ララトン」なる地名の場所に運ばれたという情報は、胡昶氏によると、ララトンに保管された作品は一九七〇年代から九〇年代に東北電影公司以製作されたものであるため、満映とは関係がなく、また現在ララトンには東北



満映時代から続く長春の映画館。現在はショッピングセンターになっている。

電影会社の倉庫もなく、田園地帯となつていくという。さらに一九五〇年代の初頭、満映時代のフィルムは北京の電影資料館に移管され、フィルムのタイトルも登録されて資料館の管理下に入ったことが改めて確認された（その後、東北電影会社の音楽隊のテノール歌手、馬氏の証言を入手。馬氏によると、五〇年代初頭にトラック三台分のフィルム缶が北京に送られたそうである。実際に馬氏は運搬を手伝った）。

現在までに日本の研究者が数回にわたって北京の電影資料館側と満映時代の映画の有無について接触を試みたが、電影資料館の公式回答は「存在せず」である。この不可思議な回答に対する胡昶氏の見解は、政治的な理由（満映は今までタブー視されていた）と古い作品は画質等が落ちていくため、修復する手間や費用などの予算の点で放置されたままになっているのではないかという。ソ連の接収から逃れた満映作品のネガが無事に北京の電影資料館に移管されたとすると、「日本映画」のポジフィルムはどうなってしまったのか。岸氏によると、満映作品のネガと映画館に配給するポジは、別管理であり、保管場所も違っていたという。しかしながら、こうしたポジフィルムがたとえ接収を免れ生き延びていたとしても、第二次世界大戦後の中国の幾度にもわたる困難な政治状況の中で、生きていくだけで精一杯であった東北地方の人たちにとって、映画フィルムは価値のあるものではなく、ましてや「敵国」日本のフィルムなどは関心のある人間もいなかったため、今まで発見されることもなかったように思われる。

「日本映画」に対する当時の評価についても、胡昶氏も孫教授と同様の見解であった。当時、映画は高級娯楽であり、庶民には手が届かなかった。当時の映画のチケット代は一律一元（学生割引券が二画）であったが、この価格は、結婚式の女性の礼服が十元であったことを考えると、かなり高額であったことが予想される。「日本映画」を見る観客は満洲在住の日本人であり、当時の「満洲人」が見る映画は、上海映画、満映、日本映画の順であった。一九五一年以降行方不明になつていく「日本映画」のポジフィルムの中には、日本に現存しないものも含まれており、その学術的価値を強調したところ、胡昶氏は我々に次のような情報を提供した。

二〇〇二年にハルピン在住のコレクターから胡昶氏に連絡があり、以下のフィルムを購入したとの情報を得た。胡昶氏によるフィルムのタイトルは以下の通りである。

『攻略蘆洲』

『參觀建國忠靈塔』（哈爾濱）

『參觀孔子祭』（哈爾濱）

『防衛訓練後の閱兵式』

『開拓団哈爾濱』

以上の五作品はいずれも記録映画であり、日本軍か日本のメディアが撮影したものの可能性があるといる。満鉄の記録映画に該当作品はなく、こうしたフィルムが発見されたことは奇跡的であるが、今後も日本の研究者が積極的に働きかければ新たに別の映画フィルムが発見される可能性が期待できることが確認された。

吉林省社会科学院日本研究所

中国では一九三二～一九四五年までの期間、すなわち満洲事変から日中戦争に到る期間は「十四年」と呼ばれている。一九八六年に発足した同研究所は、日本の軍国主義が中国東北地方に及んだ政治、経済、文化全般を検証する機関である。長春以外にも、東北三省（遼寧省、吉林省、黒龍江省）の主要都市である瀋陽、ハルピンに同じく研究所があり、現在までおよそ四〇種類に及ぶ書籍、雑誌が刊行されており、特に雑誌『東北淪落史研究』は年四回発行され、日中両国の研究者が論文を投稿している。同研究所の七階の十四年史年資料室にて日本研究所研究員の孫纏武氏、東北淪落十四年史総編室主編の李茂杰氏に面会。同階は満鉄資料室もあり、旧満洲時代の公的研究機関の中心を担っている。ちなみに満映研究者の胡昶氏もメンバーの一人であり、『満映——國策電影面観』も一九九〇年に同研究所から刊行されている。

両氏によると、満洲時代当時はフィルム管理が非常に厳しかったため、民間に流されたフィルムはごく少なく、また、文化大革命の際には日本と関わるモノを

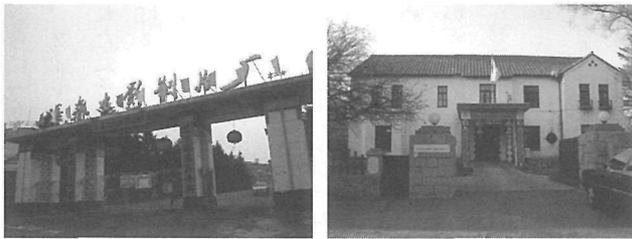
持っているだけでも大問題であり、個人の写真でさえも断罪されたため、そうしたフィルムを発見することは困難であるという。また、ロシアの GosFilm フォンドについての情報は確認済みだが、ロシアと中国との政治的關係により、接収されたフィルムを買い戻すことは現実的ではなく、むしろ、フィルムと同じく接収された機密文書の方が中国側にとつては重要であるようだ。

黒龍江省ハルピンの露店でフィルムを偶然購入した人物についての情報を伺ったが、フィルムの内容は胡昶氏と同じであることが判明した。購入者の氏名は尚玉再、ハルピン在住、五〇歳代。李茂杰氏は実際にテレシネされたヴィデオを二〇〇二年春に鑑賞している。内容は軍隊の閲覧式、勤労奉仕、ハルピンの忠霊塔（現在は存在せず）を祭る儀式、ハルピン工業大学、孔子の祭り、徐洲攻略などいずれも数分間がひとつに纏まったものである（いずれも胡昶氏提供のタイトルと一致する）。露店で売りに出される満洲時代のものではコイン、紙幣などはあるがフィルムは非常に珍しいという。なお、同研究所から以下の書籍、雑誌を進展された。

* 寄贈書籍…『満鉄史』、『満映 — 国策映画面観』、『東北淪落史研究』二〇〇二、一〜四。

長春撮影所内部見学

雷猷禾工作室の美術監督、龔明輝氏の案内で撮影所の内部を見学。映画産業不振により、建物の一部は老朽化が激しく、閑散とした印象を受ける。大戦後に新築された建物もあるが、満映時代（康德六年七月）に建設された建物が現在も使用されている。また、満映設立当初、六つのステージが建設されたが、そのステージも当時のままで現在も使用は可能であるという。一ステージに既成のセットを作り、来館者が見学可能なテーマパークのようなステージがあり、一日あたり二〇人から三〇人の来館者がいるという。現在の



長春撮影所の内部写真

従業員は約三〇〇〇人。

瀋陽

長春では日本軍、あるいは日本のメディアが撮影したと思われる記録映画に関する貴重な情報を得て、次の目的地である瀋陽に向かった。瀋陽では事前に訪問する旨を伝えていた瀋陽総領事館、遼寧省図書館にて情報収集を行うとともに、「九・一八」歴史博物館の聞き取り調査、そしてフィルム発見場所である「露店」をキーワードに瀋陽の骨董市場を訪れた。

瀋陽総領事館

去年の五月に北朝鮮の脱北者の事件があっただけに、領事館の警備は厳重で、パスポートを数回提示してやっと入館するほどのものしい雰囲気だった。新聞文化処の翁鉄軍氏と面談し、当方の主旨を改めてお伝えしたところ、満洲時代の旧日本人居留地にある東北映画館の場所を聞く。また、「九・一八」歴史博物館が満洲事変の遺留品を募集しているという情報を得たことから、急遽、「九・一八」歴史博物館で満洲時代のフィルムの有無について確認することとなった。

遼寧省図書館

当館は、元東北図書館だけあって、満鉄関係の資料は豊富である。王篠雯副館長の案内で館内見学するとともに、当館所蔵の映画関係書籍、雑誌を確認した。未整理書籍は十数万冊に及ぶ（雑誌含まず）が、その中から映画関係の雑誌、書籍を閲覧させていただく。複写は一頁につき五元で、事前に連絡すれば複写は可能である。遼寧省図書館で確認出来た映画関係書籍、雑誌類は以下の通りであ



瀋陽の東北映画館

る。

雑誌類：『映画評論』一九三五年一、三、九月号、『電影画報』一九四二年六、八、十二月号、一九四三年一、三、十二月号、一九四四年一、六、八、十二月号（中国語版）前身雑誌の『満洲映画』は長春市図書館にあり。

書籍類：『文化映画の方法論』一九四〇年、久保田辰雄、『映画と国家』岡田眞吉、『国民娯楽の問題』権田保之助、『映画劇と演劇』橋高廣、『フィルム』富士写真フィルム、ダイアモンド社、『プロレタリア映画基礎理論』メンツェンベルグ、秋田雨雀訳、一九三〇年、『映画芸術研究』ダイアモンド社、一九三四年、『映画監督と脚本論』一九三〇年、プロドフキン、佐々木能理男訳、『プロレタリア映画入門』一九二八年、村山知義、『発声映画脚本制作論』一九三二年、往来社、佐々木能理男、『映画』一九三八年、ダイアモンド社、吉岡重三郎、『満洲藝文年鑑 康徳九年版』一九三五年、満洲富士房、『映画五十年史』一九四二年、菅見恒夫、鱒書房、『日本映画選書 映画文献史』岡田眞吉、一九四三年、大日本映画協会、『水のなかれ』一九三四年、桑野桃華、聯合演芸通信社。

“九・一八”歴史博物館

満洲事変から日中戦争に至るいわゆる「十四年史」の歴史を展示する博物館として、一九九一年に開館した同館は一九九七年、“九・一八”事変博物館から歴史博物館に名称を変更、一九九九年にリニューアルオープン運びとなった。“九・一八”事変から皇姑屯事件等の事件の説明や“七三一”細菌部隊の実態など、日本の軍国主義の台頭、抗日戦争の勝利と共産党政府の樹立に至る過程が写真や蠟人形、絵画や



“九・一八”歴史博物館に展示されていた「日本映画」のポスター類

模型などで再現されている。さらに、最後尾の展示コーナーでは日本の歴史教科書問題、石原慎太郎都知事や小泉純一郎首相の靖国神社参拝問題などが大きく取り扱われており、過去の侵略戦争に対する日本の歴史認識の最新情報を常に注視し、即座に反応していくという姿勢が伺える。「日本映画」は「法西欺思想文化統制」の一例として嵐寛寿郎主演の『海の豪族』や長谷川一夫、大河内伝次郎の主演映画のポスターが展示されていた。その後、弁公室主任の崔俊国氏と面会し、満洲事変の遺留品募集の情報について質問したが、フィルムに関する情報はなく、現在当博物館でも探している最中であるという。また、崔俊国氏から瀋陽の骨董品店が集まる瀋陽北市市場の所在地の情報を伺った。

瀋陽北市市場

数十店の骨董店が集積する瀋陽北市市場は、陶器、掛け軸、家具などを中心に、古銭、古紙幣、写真、中には毛沢東専門グッズのような店もあり、活気と混沌が入り乱れた市場である。満洲時代の骨董を専門に取り扱う奉泉閣古玩店の李全孝氏、瀋陽古玩城二樓八四号の孫氏に映画フィルムに関する情報を伺う。奉泉閣古玩店では満映配給の上海映画『化身姑娘』のポスターを発見、価格は約二万円。その他にも日本映画の主題歌のチラシを数点見せられた。また、満洲国の国旗や写真、紙幣、コイン、証券など当時の雑多な生活用品が陳列されていた。フィルムに関しては記録映画、劇映画ともに売売したと店主は語っていたが確証はなく、当方の住所を伝え、フィルムが発見されれば連絡をもらう旨を伝えた。

大連

長春、瀋陽を訪れて実感したこと
は、大学、社会科学学院、博物館、図書館などのいわゆる公的機関にはフィルムは現存しないということである。瀋陽の骨董市場を訪れ、改め



【化身姑娘】のポスター

て「日本映画」のポジフィルムはこうした民間のアンダーグラウンド的な市場に流通していることを確信した。大連では、当初から訪問を予定していた大連図書館での情報収集よりも、時間が許す限り、新たな情報を求めて骨董店を隈なく訪ねまわること方向転換した。

大連市中山公園華宮古文化市場

タクシー運転手からの情報により大連の骨董市場を訪ねたが、映画フィルムはなく、その店主から映画等に詳しい骨董市場の所在情報を得、中山公園内にある華宮古文化市場に向かう。その一角に店を構える宋国偉氏経営の怡古齋は日露戦争時の旗や、満洲国時代の日本家屋の一部、家具などの骨董が多数陳列されていた。宋国偉氏に話を伺ったところ、次のような情報を得た。日本人業者が満映ポスターを大量に買いつけ、李香蘭主演映画（題名不明）についても取引の実績があるという。現在、店内に所蔵されていた映画フィルムは戦時中の日本のアニメーションフィルム、パテ・ベビー製九・五ミリフィルム（シエークスピアの『The Tempest』）、ヨーロッパ映画らしきフィルムなど五巻があり、いずれもフィルム缶に入っておらず、剥き出しのままビニール袋に纏めて保管されていた。三五ミリの日本のアニメーションを五〇〇円で購入。タイトルは『少年鉄児 敵陣突破』。『日本アニメーション映画史』（山口且訓、渡辺泰著、有文社）にも該当するタイトルはなく、わずかに二分弱の短編フィルムであるものの、フィルムの状態も良好であり、かつ日本で現存しない作品である可能性が高い。タイトル不明のヨーロッパ映画フィルムについては一コマ分を切り取って確認用とし、帰国した後に小松弘先生にタイトル確認を依頼することにした。名刺交換し、映画フィルムを入手した場合は必ず連絡をもらうよう約束。

大連図書館

同館館長の張本義氏と面会。フィルム所蔵情報の端緒が大連図書館だったため、国文学資料館、元大連外国語学院の横山邦治教授のルートを通じて大連図書館には度々問い合わせを行ってきた。しかし総領事館からも正式にフィルムは無

いとの連絡があったことから、今回は、早稲田大学図書館の紹介と映画フィルムに関する情報収集の聞き取りを行った。張館長は大連図書館長に就任する以前（九一年〜九七年）に大連市文物管理委員会弁広室主任、大連博物館館長、文物研究所所長を歴任しており、いわば骨董品の発掘、検査の専門家である。張館長によると、在任中に満洲国時代の写真以外の映像資料は目にしたことはなく、今後発見が期待出来る分野であるという。大戦後にソ連が進攻した際に、大連図書館所蔵の一部の文献資料（宋元時代）が接収されたらしいが、現在所在は不明のままである。『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』を寄贈し、当図書館では中国の国宝を所蔵している旨を伝えたと、張館長は、早稲田大学図書館には大変興味があり、一度図書館訪問をしてみたいと語った。また、現在満鉄書籍目録を作成中で、今年の六〜七月頃に刊行予定だそうである。大連図書館の案内等の資料をいただく。

*寄贈資料・大連図書館二〇〇一〜二〇〇二年要覧、『白雲論壇』二〇〇二年一月号、古典詩詞吟詠演唱会CDなど。

瀋陽総領事館在大連出張駐在官事務所

瀋陽総領事館で紹介を受け、所長の川本順一氏と面会。早稲田大学演劇博物館COEの主旨、満洲国時代の日本映画に関する情報収集等の協力を要請。大連市の総合案内、大連市に偏在する博物館やテレビ局など、目ぼしい機関の連絡先が書かれたリストをいただく。東北地方は満洲国時代の歴史を背負った地域であり、長春の満洲国の遺構は全て「偽満洲」と呼ばれていることから想像できるように、日本人が安易に満洲国時代の過去を発掘することに對して非常に敏感であるという。また、図書館等の公的機関には日本人に満洲国時代の資料を見せるなどという通達が出ているとも言われている。小泉首相の靖国神社参拝の折にも、総領事館や大連出張所の前でデモがあり、依然として日本の侵略戦争の痛みを忘れたわけではないため、そうした過去に對する配慮が必要であるとのアドバイスをいただいた。

*寄贈資料・二〇〇二大連交通旅游図、大連概要、大連各大院校及主要報社有并

情況一覽表

今後の課題、感想

本プロジェクトは、元満映社員の岸富美子氏が目撃した、「満洲赤十字社」のポライ室に所狭しと積まれた「海のようなフィルム」が藻屑となって消えてしまいう前に、何とかこの眼で突き止めたいという情熱から出発したものである。長春、瀋陽、大連の主要都市における公的機関には映画フィルムは残念ながら保存されていなかったものの、長春の胡昶氏の記録映画に関する情報から、公的機関に抵触しない、いわゆるアンダーグラウンドの市場にフィルムが密かに流通していると確信し、瀋陽では上海映画のポスターを発見、そして最終目的地の大連で遂に映画フィルムを発見した。大連の骨董店では、日本家屋の柱などが陳列されていたが、これらは近年の大連の再開発に伴って取り壊された日本家屋の中から売買されたものであり、映画フィルムもこのルートで偶然発見されたものであると考えられる。したがって、こうした映画フィルムがアンダーグラウンド市場で流通し始めたのはごく最近のことであり、今回の訪中は実にタイミングが良かったということになる。

今回の訪中では二つの成果を得た。ひとつは胡昶氏情報によるハルピン在住コレクターが所蔵する日本の記録映画の現存確認であり、二つ目は先に述べた大連での映画フィルムの現物発見である。二つの成果は映画部門における演劇博物館アーカイブ構築の可能性を開くものである。というのも、映画は鑑賞者がいてこそ学術的価値があるものであり、好事家の手で安穩と保存される類のものではないからである。そのためには映画フィルムを購入、修復保存するための豊富な資金と、作品の一般公開が必要であり、こうしたフィルムアーカイブの構築は、日中映画史のさらなる見直しと発展が期待できるように思われる。そして、こうしたフィルムアーカイブ構築は、フィルム供給側の中国の協力が不可欠である。当面、映画フィルムはアンダーグラウンド市場においてのみ流通しているため、フィルム収集家、好事家によるフィルムの存在の調査については骨董店の店主との情報交換はもとより、現地の研究者との積極的な交流が必要であることは言う

までもない。さらに、公的機関への働きかけも今後の課題となろう。従来までは映画フィルムが公的機関で確認されれば、そうしたフィルムは北京電影資料館に移管されていたことが考えられる。しかし、今回のケースのような戦前の「日本映画」が北京電影資料館の目を潜り抜け、今まで密かに流通していたということはむしろ歓迎すべき事態なのかもしれない。しかし、フィルムの保存修復と一般公開を促進するためには公的機関の協力が不可欠であり、今後は日中の共同研究の可能性を探っていきたい。

今回の訪中で、筆者が抱いていた「日本映画」に関する淡い期待は悉く打ち碎かれた。日本において、少なくともテレビが台頭するまでは日本国民にとって、映画は大衆娯楽であった。しかしながら、日本統治時代の東北地方は貧しく、映画鑑賞どころではなかったというのが現実であり、たとえ映画を見ても、「満洲人」が好んだ映画は圧倒的に上海映画であり、とりわけ満映が発展する一九四〇年以降、「日本映画」は満映作品よりも下位に置かれた。「満洲国」に大量に輸入された「日本映画」、とりわけ名作といわれた数々の作品は「満洲人」にとっては何の関心もなく、専ら現地在住の日本人の鑑賞用であり続けたのであり、戦前に綺羅星のごとく製作された数々の「日本映画」の名作は、ハリウッドのように他国の国民を魅了することはなかったのである。こうした事実は日中の「過去」に関する問題とも無関係では決してないだろう。その点について、帰国後に行つた岸富美子氏のインタビューで貴重な証言を得た。岸氏によると、当時の満映では毎週土曜日に新着の日本映画を鑑賞する催しが開かれており、たまに中国人が製作する上海映画が上映されたそうである。上海映画が上映された際の中国人満映社員たちの反応が圧倒的で、まさに「飛び上がって喜んで」鑑賞していたという。当時の満映社員は日本人が多かったが、社員である中国人との関係も比較的良好であった。だからこそ、その後日本の映画人の協力のもとに「中国映画事業のゆりかご」とも呼ばれた「東北電影公司」が誕生したという歴史的事実もある。とはいえ、岸氏の証言は満映における中国人スタッフの本音を物語る貴重なエピソードであり、そうした意味においても「満映」に対する過大な評価は偏狭なナシヨナリズムを再生産する危険性が潜在しているのである。したがって、満映に

関する考察については時機を持って北京電影資料館やロシアのゴスフィルムフォンドが所蔵しているとされる、映画フィルム作品分析から始めるべきである。

特に日本の場合、満映スター「李香蘭」山口淑子」という数奇な運命を辿った女優が神話化される傾向にあり、近年は李香蘭に関する優れた研究書が刊行されているものの、それらはいくまで「李香蘭」という稀有な女優を通してみた「日本人」による表象分析であり、現実の「満映」ではないのである。

「九・一八」歴史博物館における、思わず眼を背けたくなるような東北地方の住民に対する残虐非道の数々の記録と対峙した際、そこには強烈な「反日」イデオロギーが背後にあるものの、一九九七年に「事変」から「歴史」に名称を変更した中国サイドの意図を我々は汲み取らねばならないし、日本人としてこうした事実を目を逸らさず過去と向き合う姿勢が必要であることを痛感した。またこうした姿勢がなければ、中国人の研究者との共同研究など実現不可能であるように思われる。過去の映画フィルムを歴史化する場合は、現在の歴史認識から出発する場合が多々ある。まずは日中両方の共同研究を通じて相互理解に努める態度が何よりも急務であるように思われる。今回、「満洲国」ではきわめてマジナルな存在であった、膨大な数の「日本映画」の所在が、様々な政治的混乱を経た東北地方において偶然にも発見されたことはまさに奇跡的とでもいうべきである。しかし、こうした「奇跡」を文字通り奇跡とすることなく、今後散在する「海のような」映画フィルムを根気よく探し続けていくことが必要ではないだろうか。

最後に、今回の出張にあたって、研究協力者の佐藤秋成氏（本学文学部非常勤講師）から多大な協力を得られたことを強調しておきたい。氏の情報収集力、交渉力がなければ、今回の映画フィルムの発見には到底辿りつけなかった。改めて御礼を申し上げたい。

参考資料

- 「ゴスフィルムフォンドの日本映画 ―その走り書き的報告―」佐伯知紀、NFC ニューズレター一九九七年一二月号
- 「中国で開催されたシンポジウム アジアの映画コレクションについて」(上) 岡島尚志、同右
- 「調査報告 ゴスフィルムフォンド所蔵の日本映画リスト(1) 劇映画」佐伯知紀、NFC ニューズレター一九九八年七月八月号
- 「歴史を生きぬいた映画たち ―日本・中国・ロシア―」佐伯知紀、NFC ニューズレター二〇〇一年一二月号
- 満鉄記録映画集ビデオパッケージ
- 「映像の証言 満洲の記録」テンシャープ・コレクション